

大学—小学校の連携による寸劇を用いた食育の実践

小出 良幸¹森重 正也²柴山 祐子³

要 旨

旭川大学短期大学部と小学校とが連携して食育実践を進めている。小学校の限られた時間において、食育寸劇という手法を実践したところ、小学生には短時間でも効果があることが明らかになった。大学と小学校の連携は、小学生だけでなく大学生にとってもメリットがあり、双方向的な学びが期待できる。連携による食育寸劇は重要な手法になる。

キーワード：連携，食育，寸劇，栄養士課程，小学校

1 はじめに

健康は社会の基盤であり、市民生活の前提ともなる。子どもは日本や社会、地域の未来を担う存在で、健康意識の育成は不可欠となり、子どもへの食育活動は重要となる。常に子どもが生まれて育っていくので、すべての年代で食育は継続的に実践されなければならない。子どもへの食育は、家庭における重要性もさることながら、学校での実施が大きな役割を果たす。食育は国を挙げて取り組むべき課題といえる。

2005年の「食育基本法」成立は、このような重要性の認識を背景にしている。目的として、「国民が健全な心身を培い、豊かな人間性を育む食育を推進するため、施策を総合的かつ計画的に推進する」ことを掲げていることから明らかである。現在、「食育基本法」により、食育の重要性が広く周知され、国を挙げて推進されている。政府が食育推進基本計画を作成し、それに基づいて地方自治体でも、食育推進計画の作成を努力することが明記された。実施にあたっては、食育推進会議が置かれ、家庭や学校・保育所などが、地域と連携して取り組むことが掲げられている。その結果、さまざまな地域で、いろいろな行政組織や教育機

関などが連携をしながら、多様な実践が進められてきた。

社会や経済、国際情勢が常に変化していることから、食育の施策も常に修正をしていく必要があるだろう。また、社会構成や教育環境の変化もあることから、食育の方法論においても常に新たな実践例も積み上げていくべきである。

その事例として、旭川大学短期大学部（以下、旭川短大と呼ぶ）生活学科食物栄養専攻と永山東小学校とで連携を進めてきた。両者は継続的な食育実践を進め、その実践のひとつの成果として、2018年に実施した小学校での調理実習について、森重他（2019）で報告した。地域連携による小学校での食育活動は重要なものであることが示された。本論文では、一連の連携による教育実践のうち、食育の手段として寸劇を中心にまとめたものである。先行研究から教育実践の現状を把握し、その有効性を整理していく。次に、旭川短大と小学校とが連携して2018年に実施した寸劇を用いた食育の実践の概要を紹介し、その結果をまとめることで、有効性や意義を検討していく。

2 日本における食育

2.1 食育への取り組みと課題

2005（平成17）年の「食育基本法」の制定に伴って、関連する法律も整備されてきた。例えば、2005年の「栄養教諭制度」の実施、2006年に農林水産省による「食育推進基本計画」の策定、2008年に「学校給食法」の

¹ 札幌学院大学 人文学部こども発達学科；
koide@sgu.ac.jp

² 旭川大学 短期大学部生活学科食物栄養専攻；
morishige-m@live.asahikawa-u.ac.jp

³ 旭川大学 短期大学部生活学科食物栄養専攻；
sibayama-yu@live.asahikawa-u.ac.jp

改正, といずれも学校での食育の取り組みが重視されたものである。学校現場でも, 2008年には小学校・中学校の学習指導要領で食育の推進が示された。2014年には文部科学省「スーパー食育スクール事業」が実施され, その事例も紹介されてきた(土方他, 2017)。

「食育基本法」の制定後10年を経て, 2015年に改正がおこなわれた(内閣府食育推進室, 2015)。改正において, これまで内閣府が担ってきた「食育推進会議」が農林水産省におかれ, 内閣総理大臣に代わり農林水産大臣が決定権者となった。農林水産省の消費・安全局消費者行政・食育課が食育推進室を運営している(農林水産省, 2018)。厚生労働省では地域保健活動や生活習慣病の予防で, 食品安全委員会では食品の安全性を, 消費者庁では食品ロスなどの防止など, 多くの省庁が協力して進められている。

「食育基本法」の改正に基づき2016年に「第3次食育推進基本計画」が策定され, アンケートに基づいて5年間の重点課題が整理され, その対策のための施策がまとめられた(農林水産省消費・安全局消費者行政・食育課, 2016)。その一環として文部科学省でも, 食育を学校教育に取り入れた。2017年度には, 小学校・中学校の新学習指導要領の改訂がなされて食育への取り組みが再度確認された。「小学校学習指導要領」(文部科学省, 2018)の第1章総則, 1 小学校教育の基本と教育課程の役割, 2 (3)「健やかな体」「学校における食育の推進」で「各教科(中略)においてもそれぞれの特質に応じて適切に行うよう努めること」と示された。さらに, 学校だけでなく「家庭や地域社会との連携を図りながら」, 児童への食育が充実される多様な取り組みの必要性も示された。それは, 「生涯を通じて健康・安全で活力ある生活を送るための基礎」を培うことが目的とされた。

日本において食育は, 省庁横断的に継続的に取り組まれている。このような取り組みが, 現在さかんに実施されているということは, まだ課題が解決されていないことを意味する。かつて, 千葉(2009)は, 近年の食をめぐる, 食の変化, 食に関する理解や判断力の低下, 栄養の偏り, 不規則な食事, 肥満と過度の痩身, 生活習慣病の増加, 食に関する感謝の念と理解の欠如, 食の海外への依存の問題, 食文化の喪失, 食の安全上の問題, を課題として挙げた。これらの課題提起がなされてから10年たった今でも, まだ解決されていないものも多い。したがって, 現在も, そして今後

も, 食育の実践は継続的になされていく必要があるだろう。

2.2 食育の教育実践の状況

食育の教育実践の現状を把握していく。教育現場では, いろいろな視点での多彩な取り組みがある。例えば, 西村他(2010)は, 子どもたちが栄養の知識を身につけるための方法を提案した。食育キャラクター「食まるファイブ」を活用したもので, 「親子料理コンテストー最強の食まるカレーコンテストー」(刈谷市農政課主催)という活動を通じて進められたものであった。このコンテストは継続されており, 西村他(2018)は, 「親子料理コンテスト」第二回の結果と「食まるファイブ」の食育の効果を報告した。丸山他(2010)では, 「食まるファイブ」を伝えるグッズが小学校の食育で効果があることを示した。また, 「食まるファイブ」を活用して, 「栄養指導手袋」をキャラクター化して学校での食育での活用を図った(丸山, 2009)。

児童への食育も多様な取り組みがなされてきたが, 正攻法ともいえるべき, 教科授業内での食育の実践もある。小島他(2013)は, 市販弁当と手作り弁当の比較を, 小学校家庭科の授業でおこなった。コンビニ弁当と手作り弁当のウインナーの食べ比べをして, 食物選択の学習をした結果を報告した。城戸他(2012)は, 小学生への絵本の読み聞かせで, 健全な食行動への動機付けが形成されることを実践から把握した。また, 坂本他(2013)は, 4学年社会科および総合的な学習の時間で, 食べ物を大切にし, 残さず食べることをねらいとした食育を実施した。食育前後のワークシートで学習成果を検討した結果, 残さず食べようとする意欲が多くみられ, 残食率は低下したことを報告した。

大学との連携による教育実践の先行研究も報告されている。根来他(2015)は, 大学の授業と小学生の総合学習を協同した授業を実施したところ, 小学生は大学生を身近な存在と捉え, 大学生は対象理解を深め, 新たな力を発見できるなどの効果が見られた。大学生と小学生が情緒的な刺激を受けあい, 相互の学び合いの仕組み(ピア・エデュケーション, peer education)の効果があることも報告された。栄養教諭は, 管理栄養士又は栄養士(いずれも国家資格)と教員免許を持ち, 学校給食管理と食に関する指導の担い手として重要である(宮下, 2018)。奥野他(2011)は, 栄養士を

養成する大学と地域との連携で食育を通して、学生の企画力やコミュニケーション力などの実践力が育成できることを示した。

寸劇を用いた教育実践の先行研究もある。小玉(2009)は、小学校を拠点に地域の自然・社会・文化等の持続可能性に関する総合的な課題を解決するための子どもと大人の協働的な教育学習活動(ESD: education for sustainable development)の一環として、成果発表を寸劇でおこなった。前川・東江(2013)は、高校生と大学生の協働による小学生への食育劇による食育をおこなった。高校生と大学生が協働して小学校での食育を出前授業としておこなうものであった。その結果、「気づきの連鎖効果」が明確になったとした。高校生が「いただきます」の意味を、大学生が食に対する知識を伝えたところ、小学生は自己変容につながる効果がみられ、高校生や大学生にも使命感の向上と自己効力感の向上がみられ、協同学習の場になるという結果を示した。森山他(2012)は、大学生が協働によって「食まるファイブ」による食育劇を小学生でおこなった。「食まるファイブ」として食事を5つ区分にして、主食(黄:りきまる)、副菜(緑:ベジまる)、主菜(赤:にくまる)、牛乳・乳製品(白:ほねまる)、果物(紫:フルーツまる)、一緒にバランスよくとることを子どもにわかりやすく示した。森山・本山(2012)では、食育の手法としてキャラクターによる食育劇をおこなったところ、低年齢層に効果的であることを示した。坂本他(2015)は、栄養士課程の学生が地域住民と小学生を対象とした食育劇「昔話に出てくるおやつを作ろう!」を実施し、料理教室の食育実践をおこなった。

上述の各種の先行研究から、寸劇による有効性(森山・本山, 2012)と、地域連携の重要性(奥野他, 2011)、大学生との連携による小学生の食育意識の向上(森山他, 2012)が示されてきた。また一方向の効果だけでなく、大学生への教育効果(前川・東江, 2013)、ピア・エデュケーションの相乗効果(根来他, 2015)、栄養士課程の学生への効果(坂本他, 2015)などがあることも示されてきた。大学と小学校の連携による寸劇を用いた食育実践は有効な手法であり、今後も実践していく必要があることが示されてきた。本論文での実践は、その延長線上に位置するものとなる。

3 寸劇による食育実践

3.1 大学と小学校の連携の概要

旭川短大の生活学科食物栄養専攻の森重ゼミナールの学生および地域栄養食材研究会サークルの有志学生は、小学校との食育を地域連携として実践している。食育の教育実践は、学年別に(各学年につき年1回程度)、2012年度より2018年度まで7年間実施され、現在も継続中である。

旭川短大と連携したのは旭川市立永山東小学校で、旭川市北部の永山地区に位置している。永山地区はかつて農業地帯であったが、近年は新興住宅や大型商業施設も増加中の地域であり、1学年1学級で各学年10名前後の小規模校である。校内に給食施設があり、児童・教職員の給食(90食程度)がつくられている。永山東小学校と旭川短大は近接しているため、地域連携の教育実践には適した地理的条件となる。

連携を通じて、小学校では食物栄養を学んだ学生による食育指導を受けられることになり、短大生には児童への栄養指導の実践体験、地域貢献活動と食について考えるなど、双方に教育効果が期待される。

2018年には栽培から調理までおこなう食育実践と、今回紹介する寸劇を活用した実践などをおこなってきた。調理実習による食育実践は森重他(2019)で報告したので、本論文では寸劇を用いた食育実践の概要を紹介し、その有効性を検討していく。

3.2 1年生への寸劇「あまり給食をたべなかった桃太郎」

7月24日12時35分~12時50分(給食時間)、1年生5名(男子2名、女子3名)に対して、短大生(7名)が食育寸劇「あまり給食をたべなかった桃太郎」(約8分)をおこなった(図1)。桃太郎の話をもとにした寸劇を通じて、当日の給食に用いられていた食材を利用して、給食をしっかりと食べないとどうなるのか、栄養とバランスの必要性を伝えていくことにした。

司会がストーリーを展開していく。給食をあまり食べない桃太郎がいた。桃太郎は、元気がなくすぐ風邪を引いてしまい、バイキンにもすぐにやられてしまう。イヌが、パンとじゃがいも(でんぷん)、砂糖とサラダ油を食べるように勧める。それぞれの食材の絵を「体のエネルギーのもとになる」と書いた黄色の枠にはっていき、桃太郎が食べると力が湧いてくる。司会がでんぷんや砂糖、サラダ油が、エネルギーのもとになり、



図1 1年生への寸劇「あまり給食をたべなかった桃太郎」。桃太郎は3食の食材を食べたあと、バイキンと戦って勝った様子(左)、全員の最後のあいさつの様子(右)。

力が湧いて元気になれると説明する。桃太郎がバイキンを攻撃するが、まだ勝てない。

サルがやってきて、牛乳、えび、豚肉を食べるように勧める。「体をつくるもとになる」と書いた赤色の枠に食材をはっていき、その結果、桃太郎は力強くなっていく。司会は、牛乳、えび、豚肉を食べると体が強くなっていくことを説明する。桃太郎は戦うが、バイキンの攻撃で風邪を引く。

キジがやってきて、人参と干しいたけ、白菜、もやし、たけのこ、長ネギ、しょうが、ミニトマトを食べるように勧める。「体の調子をととのえる」と書いた緑色の枠に食材をはっていき、食べた桃太郎は元気になる。司会は、野菜を食べると、病気に負けない体になると説明する。桃太郎がバイキンを倒して勝つ。司会は、桃太郎が給食を残さず食べたおかげでバイキンに勝ち、元気で強く病気に負けない体になったと述べて終了する。

寸劇の後、桃太郎とバイキンが、3色食品群について説明し、その日の給食の食材を、イヌ(黄色)、サル(赤色)、キジ(緑色)とともに分けるクイズをおこなった。

1年生は、知らない人が教室に入ってきたのが興味深かそうだった。日常と異なる地域連携による学びは、児童にとっては、新鮮で楽しかったようだ。短大生が教室から退室する時、「また来てね」との声が上がり短大生の達成感ともなった。食育活動を開始した当初の事前協議において、小学校でも連携による教育効果を期待していると、教頭(当時)から聞いていた。そのため、学校や担任との事前の協力・信頼関係を構

築することが重要である。1年生は、食い入るように寸劇をみており、サル・犬・キジが廊下から鳴き声を発しながらの登場、桃太郎が食材を「ムシャムシャ、パクパク」と食べる演技を面白がっていた。クイズでは、全員が積極的に参加し、答えが間違っても臆することなく、その後も積極性は変わらなかった。

3.3 4年生への寸劇「ペロちゃん」

12月10日12時35分～12時50分(給食時)、4年生13名(男子8名、女子5名)に対して、短大生(8名)が食育実践をおこなった(図2)。前半で当日の給食の食材を用いた「3色食品群分けクイズ」(10品)をおこない、後半で食育寸劇「ペロちゃん」で三大栄養素の消化と吸収を伝えた。シナリオは次のようなものとした。

司会が給食に使われている食べ物を、赤、黄、緑の3つの色(3色食品群)に分けられることを説明する。赤色のものは体を作るもと、黄色はエネルギーになること、緑色は体の調子を整える働きをすることを説明する。今日の給食に使われている食材を3色に分けていくクイズをした。当日の給食の食材では、牛乳・豚肉が赤色、麦ごはん・マーガリンが黄色、トマト・ミカンが緑色となる。

クイズの後、寸劇をスタートした。ペロちゃんが登場して、麦ごはんを食べる。ペロちゃんが麦ごはんをよく噛むと、だ液によってドロドロになり、胃を通過して十二指腸にたどり着くと、さらに細かくドロドロになる。細くなった麦ごはんは小腸で吸収されエネルギーに変わる。エネルギーがペロちゃんの全身や脳



図2 4年生への寸劇「ペロちゃん」. 食材を3色食品群に分けるクイズ(左)と食べ物が消化されている様子(右).

にいきわたる.

次に、ペロちゃんは牛乳と豚肉を食べる。牛乳と豚肉はタンパク質で、豚肉をよく噛んで牛乳で飲み込む。胃では胃液によってドロドロになり、十二指腸で細かく溶け、小腸で吸収され、筋肉や骨の一部に変わる。ペロちゃんの腕や足の筋肉や骨になる。

最後にペロちゃんはマーガリンを食べる。マーガリンには、脂質が含まれている。口から、胃、そして十二指腸へいき、そこで初めてドロドロに溶ける。ドロドロになったマーガリンは、小腸で吸収されエネルギーに変わる。給食も家のご飯も、しっかりと噛んで残さず食べることが大切だと伝える。さらに、イライラしたり、悲しんだりしていると消化に悪いことも伝

える。

4年生は、消化器の図を着たペロちゃん、体内の臓器の様子、消化物の体内動態に興味を示していた。

3.4 5年生への寸劇「ペロちゃん」

12月17日12時35分～12時50分(給食時)、5年生8名(男子6名、女子2名)に対して、短大生(6名)が前半に当日の給食の食材を使った「3色食品群分けクイズ」(11品)を、後半に食育寸劇「ペロちゃん」で三大栄養素の消化と吸収を学ぶ実践をした(図3)。内容は4年生の実践と同様のものにした。

前半は3色食品群分けを説明して、当日の給食の11品を分けていくクイズをした。当日の給食には、4年



図3 5年生への寸劇「ペロちゃん」. 食材を3色食品群に分けるクイズ(左)、食べ物が消化される様子を見ている児童たち(右).

生のときと同様にミカンがあった。後半に寸劇「ペロちゃん」をおこなった。台本は4年生のものと同様にしたので進行は略す。

ただし、4年生の実践における反省点を踏まえ、各消化器で栄養の形が小さく消化される時、棒つき食材を「鋭く裏返す」ことで、変化が起こった事を印象付けるように心がけ、エネルギーの炎、筋肉、骨を動かして小腸から体全体へとダイナミックに巡る様子を明確にし、またペロちゃんは消化物が体を下降して行く間、笑顔で柔和な表情でおこなうようにした。最後に司会が「食事は、良く噛んで、悲しんだりしないで食べることも大事」と伝えた。

給食の箸を止め、寸劇を全員が見ていた。ペロちゃんが疑似的に食べる素振りを楽しんでいた。このような反応は4年生では見られなかったものであった。4年生ではクイズや寸劇に移入していたが、5年生は感情移入が表面化していなかった。

4 実践の評価と意義

4.1 アンケートによる評価

寸劇を通じておこなった教育実践の効果をはかるために、アンケート調査を実施した。アンケートの質問内容は、学年に応じた表現になるように心がけた。アンケートの集計結果は母数が少人数であるため割愛する。ただし以下の数値表記は、評価の傾向を示すためのものである。

1年生では、寸劇を全員が「楽しかった」(100%)とし、食べ物の「えいよう」の話は、「わからなかった」はなかったが、「よくわかった」(40%)、「まあまあわかった」(20%)、そして「むずかしかったが、少しはわかった」(40%)と分散していたので、発達差によって理解しづらかった児童もいたようだ。「えいよう」のある給食を食べることについては、「とても大切だと思った」(100%)と、重要性を理解していた。

実践の感想として、食べないと「だめだ」、「大きくなれない」や「ネギとか緑だとわかった」などの感想があり、色と栄養の関係が伝わっていたことがわかる。「桃太郎が食べなかったのに食べたからおもしろかった」という感想で寸劇への興味を伺わせ、「クイズであまり間違えなくて楽しかった」ではクイズへの興味と有効性がわかった。

4年生では、三色食品群(赤・黄・緑)のクイズ(複数選択可)は「楽しかった」と(84.6%)と「よくわ

かった」(84.6%)、そして「ためになった」(46.6%)となり、効果が認められた。誤答した果実(ミカン)についての栄養指導は、今後担任や栄養教諭との確認が必要であろう。寸劇による三色栄養素の体内動態についての内容は、「よくわかった」(84.6%)が多かったが、「最初から知っていた」(7.7%)や「まあまあわかった」(7.7%)もあったが、「むずかしかったが、少しはわかった」(30.8%)ということから、理解しづらい児童もいたので、改善が必要となる。精神状況と消化吸収の関係については、「知っていたので、今もそうしている」(30.8%)が、「知らなかった」(53.8%)児童も多かった。今回のテーマとした精神状況と消化吸収の内容は、4年生の学齢での指導はまだ早すぎるかもしれない。また、今後学びたいこととして、シチュー、カレー、サラダなどの料理をしたいとのニーズもあった。調理実習を通じて食育を展開することは、児童のニーズにも合致し、有効な手段の一つであることが再確認できた(森重他, 2019)。また、「大学生といっしょにあそびたい、料理をつくりたい」という意見もあり、大学生が寸劇をしていることに興味を惹かれているようでもあった。

5年生では、三色食品群(赤・黄・緑)のクイズ(複数選択可)は「良くわかった」(87.5%)かつ「楽しかった」(87.5%)と、4年生とほぼ同様結果となった。ただし、11品についてのクイズでは、4年生と同じく果実(ミカン)で誤答があった。5年生でも、「簡単だった」、「つまらなかった」という回答はなかった。三大栄養素の体内動態については、「よくわかった」(65.5%)、「まあまあわかった」(12.5%)となったが、「むずかしかったが、少しはわかった」(25.0%)もあり、内容についての再検討が必要となるだろう。精神状況と消化吸収の関係については、「知っていたので、今もそうしている」を選んだ児童はいず、「知らなかった」(50.0%)となり、「自分の感情も関係あるんだなと思った」という記述による感想があった。今後学びたいことでは、4年生と同様に料理を作りたいというニーズ(62.5%)があった。

少人数のクラスでの実践ではあったが、アンケートを実施したことによって、寸劇の効果のあった点、ならびに児童のニーズ発掘など、有効な教育実践であったことが確認できた。また、内容に関しては難しかった点などもあり、今後の修正点も把握できた。

4.2 寸劇による食育の意義

1年生にとって、色分けによる三色食品群の内容は少々難しかったようだが、それなりの理解はあった。栄養のある給食を食べることが大切であることは伝わっていた。1年生での実践では、栄養にも種類があり、給食は栄養があり、元気になるためには食べること、しかもバランス良く食べるのが大切だ、というねらいは達成できた。低学年であっても、寸劇の表現に注意すれば食育として有効で意義のある手段といえる。

4年生には、大学生と一緒に活動することに興味やニーズがあることから(森重他, 2019)、連携による食育は効果的であった。今後は、寸劇に加えて、調理実習で野菜の栄養(可能なら栽培までを繋げて)を学ぶなどの手法が有効であろう。

5年生は、「また皆さんとカレーを作りたい」、「料理を一緒にしてみたい」、「楽しかったから、また作ってみたい」という感想があった。これらは、2年生のときに実施した食育実践「夏野菜カレーを作ろう」の体験の印象が強かったため、5年生でもその体験を再度したいと考えていたようだ。また、「知らなかった事も分かったのが良かった」、「いつもは五大栄養素を勉強しているが、三大栄養素はやったことないから、とても良く分かって良かった」と4年生にはみられない詳しい感想や「食品の実験をやってみたい」という積極的な意見など、4年生と比して多様な反応がえられた。

5年生は1年生の時に寸劇「あまり給食をたべなかつた桃太郎」を、2年生の時に調理実習「夏野菜カレー」を実施した学年であったが、その記憶の有無を確かめたところ、覚えていたことが確認できた。それぞれの児童にとっては年に一度の行事での食育ではあったが、印象深いものとなり記憶されていることがわかった。寸劇による有効性はすでに知られていた(例えば、森山・本山, 2012など)が、本研究においては継続性の意義も確認できた。

いずれの学年であれ、大学生と一緒に活動することに興味があると考えられ(森山他, 2012)、このようなニーズに応えるために大学と小学校の連携による食育活動は効果的であろう。学年ごとに調理実習や寸劇の内容を変えていく実践も今後の課題だろう。調理実習では「地域の食材」あるいは「自分たちが育てた野菜」を使って調理をすることで、さらに「食」への理解が

深まると考えられる。また寸劇のシナリオにおいても地域性を活かした設定や展開も可能であろう。

今回実施した食育実践が、栄養士課程の学生によるものであることが、児童よりも学校関係者(担任や栄養教諭など)に対して連携を受け入れやすくしていると考えられる(坂本他, 2015)。しかし、このような寸劇による食育は、栄養士課程の学生でなくとも、一般の大学生でも実践可能な方法論と考えられる。

栄養士を目指す短大生にも効果が認められた。将来、保育園、こども園、病院や福祉施設などへの進路が考えられ、児童(6~12歳)のいる小学校での実践体験は意義深いものとなる。学齢に配慮した寸劇を通じて、発達段階によって伝え方を変えていく必要性を実感できた。小学生のお礼の作文や「また来てね」などの反応には、率直な喜びを感じ、寸劇を苦手としていた学生も、終了後には「一度は経験するべき」と変化していた。

前川・東江(2013)に示されているように、大学生への教育効果は食育寸劇の実践でも確認できた。坂本他(2015)が指摘しているように、寸劇による食育の実践は、栄養士課程の学生にとっても学ぶことが多々あった。例えば、実践を通じて、寸劇の効果を、児童の興味や反応を通じて「直接感じる」ことで最も重要な評価を実感することになった。このような実感は、将来、社会にでたときに役立つ重要な社会体験となるであろう。近接する地域の中での小学校と大学の連携により、双方の学びと地域の理解が進む(奥野他, 2011)が、本実践でもその効果が確認できた。それは、ピア・エデュケーションという相乗効果(根来他, 2015)ともいべきものであった。

4.3 今後の課題

実践を通じて、今後の課題も明らかになった。

1年生の寸劇においては、5名のキャラクターと司会による演出により、短時間でも集中して観覧できることがわかった。栄養の理解に少し難しさがあったことから、内容の吟味、演技や演出を洗練させるために、より練習時間の確保をする必要がある。

6年前、担任や栄養教諭との連携について「ひとまず栄養教諭は気にせず、大学生が独自に伸び伸び指導してほしい」と言われた経緯があった。4年生では、消化管と栄養吸収、果実類の栄養をどの学年で、どのような内容で学んでいるかについてなど、今後は担任

や栄養教諭との連携が必要となるであろう。

5年生では、炭水化物、タンパク質、脂質は習っており、三大栄養素ではなく五大栄養素として学んでいた。しかし、4年生より誤答が多く、女子児童のクイズへの挙手も少なかった。5年生でも担任との情報交換が必要であろう。また、4年生の食育実践の1週間あとに、5年生で実施したので、4年生の反省点が活かされた。

今回は4年生と5年生で同じ寸劇を実施したが、次年度以降は学年ごとに異なった内容が望ましい。連携において、学年ごとの発達段階、既習内容を確認する必要があることがわかった。大学と小学校とが連携することで、学習指導要領や教科書での確認が必要となる。

短大生の課題として、実践の経験を蓄積し、次の学年に伝えることが難しい。また、寸劇に対してはシナリオや教具作成、クイズの出題には積極的だが、実演には消極的で羞恥感をもって演技をしている点、短大生が実践当日に急病欠席という事態も起こった。小学校も短大も限られた日程での実施になるので、体調管理と欠席対策も頭にいった実施計画が要求される。また、今後は、食育による給食の残食率などの測定も実施する必要がある。

実践を通じていくつかの課題が明らかにされ、今後、改善していくことになる。その改善への手順は、次のようなPDCAサイクルとして位置づけられるであろう。旭川短大と永山東小学校の連携による7年におよぶ食育の実践は、毎回、計画(Plan)を立ててから、実践(Do)して、その評価(Check)をアンケートによって得ることで、今後の修正点を見出し改善(Action)していくという繰り返しをおこなっている。PDCAサイクルを繰り返していくことで、よりよい食育へとしていくことが重要である。

5 さいごに

小学生の健康ならびに意識の育成は重要であるため、食育は不可欠である。旭川短大と小学校の連携を継続した食育実践を進めているが、1、4、5年生が寸劇による学び、2年生と3年生が調理実習による学びとして実施してきた。2年生と3年生の調理実習の効果についてはすでに森重他(2019)で報告したが、今回、寸劇という手法について検討してきたが、効果的であることが明らかとなった。大学と小学校の連携

は、小学生だけでなく大学生にとってもメリットがあることがわかり、双方向的な学びが期待できる。限られた授業時間の中での実践は、少ない機会を有効に利用するために地域連携は今後も重要となるであろう。

一方、課題も残った。大学と小学校との連携は、多くの学年で実施しているため、各学年での食育実践内容を、異なったものでありながらも系統性のあるものにしていくことで、より効果的になるであろう。その内容について、今後も検討していく必要があるだろう。例えば、学年ごとに寸劇や調理を交互にすることで鑑賞と体験を繰り返す、それぞれ前年の内容を反映、引き継いだものにする、また学齢に応じた表現方法(ことば使いや漢字)、台本の洗練、クイズの難易度の調整でより効果的におこなう、なども考えられる。実践の機会は限られているので、十分な準備しておく必要があるであろう。今後も、継続的に実践を積み重ね、データや経験を蓄積し、社会的発信をおこなっていく予定である。

謝辞

本研究は、旭川市永山東小学校の1年生と4年生、5年生の児童および担任など学校関係者の協力のもと、保護者の理解をいただき、旭川短大生が地域連携の食育実践として実施したものである。実践に参加した児童、短大生ならびに関係の方々に感謝申し上げる。

参考文献

- [1] 千葉諭(2009). 食育 総合調査「青少年をめぐる諸問題」, 国立国会図書館調査及び立法考査局, 121-132.
- [2] 土方直美, 中岡加奈絵, 高田和子, 金子佳代子(2017). スーパー食育スクール実施校の事業内容, 栄養学雑誌, 75(6), 164-173.
- [3] 城戸杏・高村仁知・上田由喜子(2012). 小学2年生に対する絵本を用いた食育の有効性—食知識と食態度に着目して—, 栄養学雑誌, 70(4), 236-243.
- [4] 小玉敏也(2009). 霞ヶ浦流域地域における学校を拠点としたESD実践の考察—牛久市立神谷小学校の授業事例の分析を中心に—, 環境教育, 19(1), 29-41.
- [5] 小島千明・柴英里・菊地るみ子(2013). 小学校家庭科におけるコンビニ弁当と手作り弁当の比較検討, 高知大学教育学部研究報告, 73, 33-42.
- [6] 前川美紀子・東江直樹(2013). 食育出前授業の学びとしての“気づきの連鎖効果”に関する事例研究: “食育劇”と“農場体験”を経験した学生の学びから, 名桜大学紀要, 18, 91-107.
- [7] 丸山浩徳(2009). 学校における食育キャラクター

- 食まるファイブの活用, 愛知教育大学家政教育講座研究紀要, 39, 125-126.
- [8] 丸山浩徳・西村友希・西村敬子 (2010). 食育キャラクター活用による食育推進(3)—「食まるファイブ」グッズの有効性の検討—, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 13, 179-185.
- [9] 宮下ひろみ (2018). 新指導要領における小中学校の食育活動と栄養教諭の役割—平成29年度食育指導者養成研修会の考察から, 仙台白百合女子大学紀要, 22, 117-128.
- [10] 文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf (2018年12月1日閲覧).
- [11] 森山三千江・丸山浩徳・堀田千絵 (2012). 食まるファイブによる食育劇が及ぼす児童の意識・行動変容, 愛知学泉大学・短期大学紀要, 47, 37-43.
- [12] 森山三千江・本山ひふみ (2012). 食育劇による児童の意識・行動変容, 日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集第55回大会・2012例会, 日本家庭科教育学会, 5.
- [13] 森重正也・小出良幸・柴山祐子 (2019). 大学と小学校の地域連携による栽培から調理実習までを通じた食育の実践, 旭川大学短期大学部紀要, 49, 印刷中.
- [14] 内閣府食育推進室 (2015). 食育基本法が制定されました, 24p.
- [15] 根来佐由美・上野昌江・北川末幾子・大川聡子・和泉京子 (2015). 大学と地域による協働活動: 大学と小学校によるコラボレーション授業の評価, 大阪府立大学看護学部紀要, 21, 75-83.
- [16] 西村敬子・荒川由紀子・大島敬子・尾島多恵子・所とも子・鈴木ちづ子・藤井正子 (2018). 刈谷市における「食まるファイブ」を活用した食育の推進Ⅱ—親子料理コンテスト—, 愛知教育大学研究報告. 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編, 67(1), 51-59.
- [17] 西村友希・丸山浩徳・西村敬子 (2010). 食育キャラクター活用による食育推進(1)—食育キャラクター「食まるファイブ」の活用—, 愛知教育大学研究報告 (芸術・保健体育・家政・科学技術・創作編), 59, 66-70.
- [18] 農林水産省 (2018). 我が国の食生活の現状と食育の推進について, 50p.
- [19] 農林水産省消費・安全局消費者行政・食育課 (2016). 第3次食育推進基本計画, <http://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9929094/www8.cao.go.jp/syokuiku/about/plan/index.html> (2018年10月29日閲覧)
- [20] 奥野元子・兼折真由美・坂根千津恵・飯塚由美・長島美保子・片岡晶子 (2011). 食育活動における地域連携のあり方と学生の実践能力の育成: 平成20・21年度食育活動報告, 島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要, 49, 61-71.
- [21] 坂本千科絵・森美奈子・田中恵子・坂本裕子 (2015). 栄養士を目指す学生による地域住民を対象とした食育実践, 京都文教短期大学研究紀要, 53, 161-166.
- [22] 坂本達昭・八竹美輝・春木敏 (2013). 担任教諭が主体となる社会科および総合的な学習の時間における食に関する指導の実施可能性と学習成果の検討, 栄養学雑誌, 71(2), 76-85.

Practice of Food Education Using a Playlet by Collaboration of University and Elementary School

Yoshiyuki KOIDE¹, Masaya MORISHIGE² and Yuko SHIBAYAMA³

Abstract

Junior College of Asahikwa University and elementary school have been collaborating on food education. In this paper, the authors show that the food education using playlet has efficacy for schoolchildren in limited time. We confirmed that collaboration has an effective result of bidirectional learning for not only schoolchildren, but also college students. The food education using playlet by cooperation should be an important method.

Keywords: Collaboration, Food Education, Playlet, Course of Food and Nutrition, Elementary School.

¹Department of Child Development, Faculty of Humanities, Sapporo Gakuin University; koide@sgu.ac.jp.

²Course of Food and Nutrition, Department of Life Science, Faculty of Junior College, Asahikwa University; morishige-m@live.asahikawa-u.ac.jp.

³Course of Food and Nutrition, Department of Life Science, Faculty of Junior College, Asahikwa University; sibayama-yu@live.asahikawa-u.ac.jp.